全部ある当麻町

北海道当麻町

町勢要覧

Official guidebook

当麻町は山林に囲まれた農村地域。いわば〝田舎町〟です。大きなショッピングモールやアミューズメントパークはありません。しかし豊かな自然があります。自然は空気を、水を、食物を生み出し、私たちに豊かな生活を与えてくれます。

美味しいものがある
豊かな森がある
美しい花がある
人情がある
充実した子育て環境がある
整った教育環境がある
多世代へのサポートがある
元気に暮らせる環境がある
安全安心がある
文化がある
スポーツがある
働く場所がある
移住施策がある
新しいチャレンジがある

つまり〝当麻町なら全部ある！〟

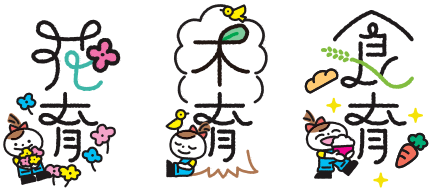
人として心豊かに生活できるものがそろっている町「全部ある当麻町」をキャッチフレーズにさまざまな施策を進めています(詳しくは20～26ページをご覧ください)。

まちづくり

当麻町のまちづくりテーマは「食育 木育 花育からつながる心育」。

命の尊さを知る「食育」
命の強さと温もりを感じる「木育」
命の優しさに触れる「花育」

当麻町の豊かな自然。そこから生まれる恵みによって、我々は心豊かに暮らすことができる。それを感じ取っていただきたいという願いから3育(食育 木育 花育)によるまちづくりを掲げています(詳しくは4～19ページをご覧ください)。当麻町は先人が知恵と汗で築いた我が郷土を受け継ぎ、人とまちと自然が共存する、未来へ持続可能なまちづくりを進めていきます。



3育のキャラクター“こころちゃん”

食育

食を育て、食の命を知る
大切な命をいただき
「いただきます」の意味を知る

当麻町には、肥沃な土壌と豊かな自然の下、先人の労苦により培われてきた農業があり、日々の生産者の研さんにより生み出される良質な農産物があります。農産物を通じて、食の命の尊さを知っていただくことが当麻の進める「食育」です。

当麻の日常にいつもある田んぼや畑の風景。そこでは春の暖かな風とともに農作業が始まり、虫がにぎやかに鳴く夏には青々と成長した穂の姿、少し肌寒い澄んだ空気を感じる秋には、実を着けこうべの垂れる作物の姿を目にします。命があるから成長がある。作物にも命があり、その命が我々に「食」を分け与えてくれている。そして作物が育つまでには、大切に大切に育てた生産者の姿がある。

食事の時に私たちは「いただきます」という声を発します。〝もらい受ける〟という言葉が起源となっている説がありますが、当麻町は食の命への感謝と、生産者への感謝の気持ちを発する言葉と捉えます。

たった一粒でも、たずさわる人にとっては大切な命。当麻町の食を口にしていただいた方に、食の命そして大切に育てる生産者の思いを感じていただきたいと願っています。

田んぼの学校

未来を担う子どもたちに食の命を知ってほしい。当麻町は食育拠点「田んぼの学校」を整備し、食育活動を進めています。田んぼの学校は町が所有する総面積1・9㌶の圃場。ここでは町内の小中学生が給食で食べるお米を全て、自ら育てています。子どもたちは初夏を感じる日差しの下、水田に入り、慣れない足場に泥だらけになりながら、一本一本丁寧に苗を植えます。夏が過ぎ、収穫の秋を迎えると肌寒い空の下、鎌を手に育った稲穂の刈り取りをします。ほとんどの子どもが、農作業は初体験。田植えと稲刈りには数百人の町民ボランティアが参加し、サポートをします。子どもたちは大変な農作業を体験することで、その命の大切さを学びます。

圃場内には農舎を併設。建物内に町産木材を使用したテーブルと椅子を並べ、子どもたちの農業学習に活用しています。また昔の農機具や当麻農業の歴史年譜も展示しており、先人の苦労や発展の経緯を学ぶことができます。農舎前には子どもたちが植樹したキタコブシの木がならんでいます。キタコブシは古来、花の咲き方でその年の収穫を占うという農業にとって重要な役割を果たしていました。その花言葉は「友情」。先人が培ってきた農業と、当麻で培った友情を大切にしてほしいという願いを込めています。

田んぼの学校では、当麻土地改良区による食育活動「田んぼの教室」も行われています。小学5年生が田んぼの学校での田植え、稲刈りに加え、育苗・生育観察、田んぼに棲む生き物の観察を学習。さらに農業に欠かせない水についても学びます。〝安全安心な食とは何か？〟を考え、当麻農業を体験した上で、自分の住む土地の農産品に関心を持ってもらう狙いがあります。

食育と農業

当麻米

お米を教材とした食育を進めることができるのは、当麻町が優良な〝米どころ〟だから。当麻米は全国で評価が高い北海道米の中において、トップクラスの評価を受けています。その理由は「安全安心かつ、おいしいお米」だから。

当麻町のある上川盆地の気候は、昼と夜の寒暖差が大きいという特徴があります。気温が上昇する夏場でも夜は涼しいため、病気や害虫が発生しにくいことから、農薬や化学肥料を抑えることが可能。さらに大雪山を水源として流れる水は農地に潤いを与え続けています。

今摺米は、「量より品質」という高い意識を生産者が共有し、栽培するＪＡ当麻のブランド米。「いつでも新米の食味が味わえるお米」として消費者から定評をいただいています。その秘密は保存方法にあります。栽培したお米はカントリーエレベーターで保存しますが、この時に籾がついた状態で低温貯蔵をします。これによりお米は生命活動を維持したまま休眠。出荷直前に籾を摺ることで、摺りたて新鮮なお米を提供することができるのです。

また、カントリーエレベーターに併設された精米施設は、単一ＪＡとして国内初の精米ＨＡＣＣＰ認証を取得。徹底した衛生管理に加え、光選別機も導入し、的確な選別も行っています。安全安心を心掛け、生産者が大切に育てたお米は出荷まで大切に管理され、皆さんの食卓へお届けします。

町内には、有機栽培米や特別栽培米などにチャレンジする生産者も。「より安全安心」、「よりおいしく」、向上心を持って取り組む生産者の背中は、子どもたちに大きな影響を与え続け、食育によるまちづくりを進める当麻町の大きな支えとなっています。

でんすけすいか

「高級すいか」として、全国に知られる当麻の特産品「でんすけすいか」。真っ黒な大玉で、シャリッとした食感と、口いっぱいに広がる果汁や甘みが特徴。ＪＡ当麻はブランド維持のために最先端の選果機を導入し、あえて厳しい基準を設定。糖度は11度、重さ４㎏、そして真円に近い形と空洞検査をクリアしたものだけが、「でんすけすいか」として市場に出されます。

でんすけすいかは、雪解けが始まる３月下旬から栽培が始まります。大きくて糖度が高く、実がぎっしりつまったすいかに育てるため、一株から一個だけを育てる「一果採り」を採用。重みによる偏りや品質の低下を防ぎ、まんべんなく日光を充てるための「玉返し」という作業を繰り返しながら、６月の初出荷を迎えます。７月下旬までという非常に短い栽培期間であり、高い栽培技術が求められます。

でんすけすいかが産声をあげたのは昭和59年。米の減反政策で日本農業が大きく変革する中、米に代わる個性的な転作物の必要性を感じていた、当時の青年部メンバー15人が栽培を開始。当麻農業の生き残りと未来を掛けた取り組みに挑みました。名称は〝田を助ける〟という願いと、真っ黒な容姿が、喜劇俳優である故・大宮敏光さんが演じる「デン助」にそっくりだったことに由来。平成18年には、日本農業のトップランナーに贈られる日本農業賞（全国農業協同組合中央会などが主催）集団組織の部で、大賞を受賞しています。我が子のように大切に育てる生産者の姿もまた食育を進める当麻町の大切な支えです。

でんすけくん

食育と農業

キュウリ

北海道でトップの生産量と販売額を誇る当麻のキュウリ。生産者が昭和54年、当麻町そ菜研究会キュウリ部会を設立。その後、品種改良や選果機更新などを重ね、着実に販売額を伸ばし、平成28年に6億円、平成30年に7億円、現在は年間販売額8億円を記録するまでになっています。令和元年にはJA当麻がキュウリ選別施設を導入。高性能な「長物農産物用選別装置」、「全自動箱詰めロボット」、「外観カメラ装置」により徹底した品質管理と、予冷設備による鮮度保持に務め、より高い品質を目指しています。

ミニトマト

ミニトマトも当麻が誇る農産品の一つ。6月から9月にかけて最盛期を迎えるミニトマトの品質は、市場から高い評価を得ています。

JA当麻のミニトマトは、でんすけすいかと同様に糖度や大きさ、形に基準を設けています。ミニトマト選果施設には、糖度センサーや傷、大きさを見分けるカメラを設置。厳しい基準をクリアしたもののみが市場に出荷されます。

〝より良く、より安全安心に〟と、生産者とJA当麻が一体となって取り組む姿勢は、食育を学ぶ子どもたちの手本となっています。

農業サポート

当麻町は、基幹産業である農林業の発展を見据え、従事する皆さんのサポートを進めるためには、関係機関同士が課題を共有し、連携することが不可欠と考えています。このことからＪＲ当麻駅前にある当麻農協事務所２階に、農林業合同事務所を設置。ＪＡ当麻、当麻町森林組合、当麻土地改良区、当麻町農業委員会、役場農林業振興課が同じ建物で業務を遂行することで、より良いサポートが可能となり、ともに基幹産業発展への取り組みに臨んでいます。

〝先祖の築き上げた農業を引き継ぎ、発展させたい〟。そう願う農業後継者。〝自然あふれる土地で、農業を営みたい〟。北海道の広大な大地に憧れを抱き、移住し農業を始める若者。新規就農される方は、未来の基幹産業を担う原石と捉え、当麻町は独自のサポートを行っています。その代表的な取り組みが「アグリサポート事業」。町内で農業研修を受ける方に対する家賃補助、また農業経営を引き継ぐために学校に進学し、学ぶ方への進学補助、農業研修を受け入れる農家への、受け入れ補助を行っています。

デジタル化が進む中、先進技術を導入したスマート農業を進めることは農業の未来への道づくりとして重要であると捉えています。当麻町はＧＰＳを活用した自動操舵装置や、遠隔で水管理が可能な自動給水装置および水位センサー、除草作業の軽減化を図るための無人草刈り機などの導入補助を行っています。

当麻町は、この大地の恵みとともに紡がれてきた技術と、最先端のテクノロジーにより、先人たちが育ててきた大切な〝芽〟を絶やさずに、未来へつないでいきます。食育により農業の素晴らしさを知った子どもたちが、憧れを抱けるような農業を目指していきます。

木育

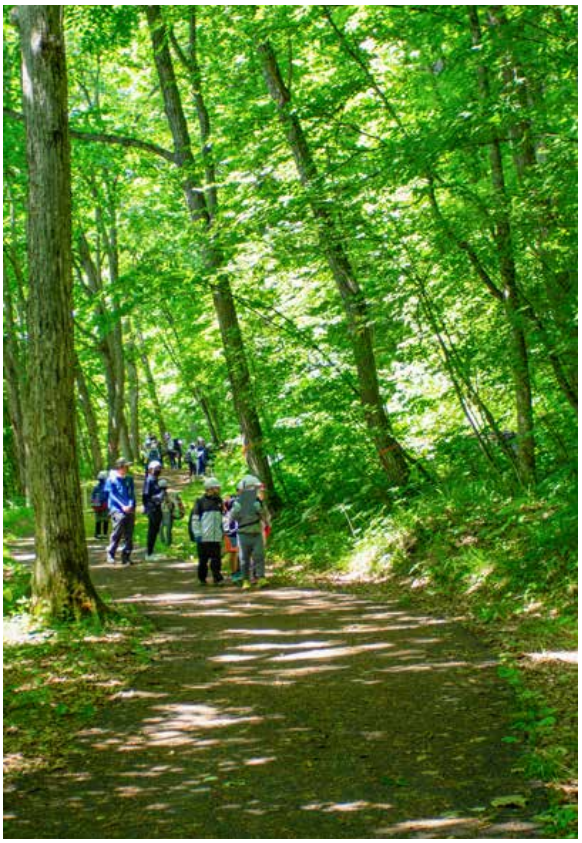
厳しい自然に生きる木
生活を暖かくする木
その息吹を感じる

うっそうと茂る山林から開拓が始まった当麻町。伐り出した樹木は、道を作り、家を作り、人の生活を豊かにしてくれました。北海道の厳しい自然環境の中で生きる樹木は、林業を生み、農業とともに町の成長を支え続けています。私たちの生活に欠かせない木を通じて、命の力強さと温もりを感じていただき、その大切さを知っていただくことが当麻の進める「木育」です。

当麻町の面積は、約6割が山林であり、パノラマで見渡す田園風景には当たり前のように山林が映し出されます。豊かな山林では、酸素が生まれ、水を生み、動植物が生きています。このかけがえのない自然は、しっかりと未来に残していかなければなりません。

私たちは木の柱や梁により造られた住宅に住み、木を原料とした家具の中で暮らしています。当麻町は食と同様、木の命をいただいて豊かに生活を送ることができていることを忘れてはいけないと考えます。

自然界に生き続ける樹木の命、生活の中に使われる樹木の温もり、当麻町の木を通じて、その命を感じていただき、〝木を大切する心〟を養っていただきたいと願っています。



くるみなの散歩道

町民の里山である当麻山は、中心市街地にポッコリとある小さな山ですが、木が生い茂り、その下にはたくさんの動植物が暮らしています。「くるみなの散歩道」は、この当麻山を1周する約3㎞のフットパス。自然界に生きる樹木の命を感じていただくための木育拠点です。風と鳥たちの唄を聞き、おいしい空気をいっぱいに吸い込む。森林浴を楽しみながら、木の命の力強さと優しさを感じてください。（入場料無料。昼間のみ利用可。冬季閉鎖）

くるみなの木遊館

くるみなの木遊館は、生活の中に使われている木を感じていただくための木育拠点です。柱や梁の構造材に町産木材を使用した木育広場には木製遊具を配置。また窓越しからは隣接された木工加工室での木材加工を覗くことができます。木工体験室では、クラフト教室なども開催しています。施設内にあふれる木の香りと触感で、樹木の命の温もりを感じてください。（開館は午前10時～午後5時。水曜日定休。入場料は町民無料。町外の方は１００円）

木育

ふるさと思い出机

木に触れた時に感じる硬さ、柔らかさ、香り、そして樹種によって違う色合いや木目…。幼い頃から木に触れることは、お子さんが感性豊かに育つ上での一つの助力になると当麻町は捉え、木に触れる機会を積極的に設けています。

その取り組みの一つが「ふるさと思い出机」事業。当麻中学校で使用する生徒個々の学習机の材料に、町産木材を活用し、生徒自らが製作するというものです。

学校の教室にある生徒用の机は、子どもたちが毎日触れるもの。学校生活において、成長を見守り、ともに思い出を刻んでいきます。町産木材の感触を感じながら、当麻での思い出を作っていってほしいという願いを込めています。

町内の小学6年生は、中学校入学を間近に控えた2月頃、「くるみなの木遊館」に赴き、机製作を始めます。生徒たちが製作するのは、机の天板部分。町産のカバ材を使用し、「くるみなの木遊館」で加工した天板と、町内の鉄工所「世良鉄工株式会社」が製作した物入れを組み上げていきます。木工をするのは初めてという子どもがほとんど。面取りのためのやすり掛けや、ボンドによるパーツ取り付けなどに四苦八苦しながら製作していきます。完成後、机には〝自分専用の証〟として、自身の名前のプレートが取り付けられます。

春、子どもたちは真新しい制服と机とともに中学生活をスタート。さまざまな思い出を刻み、3年間を過ごします。卒業時、3年間の歩みを共に刻んだ天板には、脚が取り付けられミニテーブルとして本人にプレゼントされます。

新たな一歩を踏み出す子どもたち。心のどこかに、ふるさと当麻で過ごした思い出をしまっておいてほしいと願っています。

木育活動

公民館事業として小学4年生を対象に開催する体験活動「少年ふるさと教室」。月に一度行われるカリキュラムの中には木育に関する体験活動も組み込まれています。

その一つが子どもたちによる森づくり。当麻山内にある人の手が入っていない山林で、子どもたちはアイデアを出し合い、森づくりを行っています。「ここはハンモックでゆっくりできる広場」、「ここは焼き肉ができる広場」など完成後のイメージを描きながら、のこぎり片手に、小さな支障木を伐りながら、人が通れる道や広場を作り出します。伐採した木は、子どもたちが機械を利用して砕き、道や広場のウッドチップとして大切に再利用。この取り組みは単年で完成するものではなく翌年、翌々年…とバトンを引き継ぎながら続きます。親となり自身の子どもを連れ、ともに遊ぶ姿を思い描きながら森を作っています。

四季折々の表情がある当麻の自然。木も季節により、それぞれの表情があります。新芽が顔をのぞかせる春、緑の葉が生い茂る夏、紅く色づいた葉がハラハラと舞い落ちる秋、真っ白な雪が覆いかぶさる冬。木の姿により、その命の感じ方は違います。当麻町では季節に応じ、趣向を変えた木育活動が行われています。

町内小中学校では授業の中で、積極的に木育活動が行われています。北海道公認の木育マイスターによる指導の下、夏は自然散策と併せて樹木の特徴などの観察、冬はスノーシューを履き、山林に住む野鳥や、葉が落ち夏と違う表情を見せる樹木の観察をしています。

木が生きる世界に入り、木に直接触れ、その命の息吹を感じる。木育活動の中で、木や自然を大切にする心を育んでほしいと願っています。

木育と林業

自然の中に生きる木、生活を豊かにする木。その命を感じる木育。木という自然の恵みを活用したまちづくりが推進できるのは、当麻町に豊富な森林資源があるから。

「豊富な森林資源を大事に」と手を付けずにそのままにしておくことは、森林の未来にとって良いことではありません。樹木は歳を重ねれば重ねるほど、二酸化炭素の吸収量が減り、さらに枯死してしまうと逆に二酸化炭素を排出してしまいます。カーボンニュートラルを目指すと同時に、未来への森づくりを進めるためには、伐期を迎えた樹木を伐り、二酸化炭素の吸収が期待できる若い木の育成が重要となります。

循環型林業

当麻町の民有林は約半分が人工林であり、その8割が林齢40年生を超え伐期を迎えています。その多くを管理している当麻町森林組合は、計画的に〝木を伐る→木を植える→木を育てる〟という「循環型林業」を実践し、未来へ資源を育てる林業を進めています。

そして、新たに森林組合が取り組んでいるのが、北海道立総合研究機構林業試験場が開発した新たな樹種「クリーンラーチ」の栽培。クリーンラーチとはカラマツとグイマツをかけ合わせた樹種で、野ネズミの食害に強く、成長の早さと二酸化炭素の吸収量が高いことから、地球温暖化防止の効果も期待される樹種です。令和2年にJA当麻協力のもと、農産物の育苗ハウスにおいて、苗生産の臨床試験に成功したことから、令和6年度より事業を本格化。北海道の森林の未来を担う樹種の育成が当麻町で進められています。

森林整備は、木の成長が長期にわたるため、施策の効果がすぐ表れるものではありません。当麻町は豊かな森林の未来像を描きながら、地道に着実に森林を育てています。

木材の活用

未来へ森林資源を残す「循環型林業」を進めるためには、伐った木を有効に活用していくことも重要です。当麻の山林から伐り出したカラマツなどの木材は、一般製材や梱包材などとして広く流通していますが、〝当麻産の木材〟と認知される機会はありません。当麻産木材の素晴らしさを広く知っていただくとともに、その価値を向上させるため、当麻町は町産木材の有効活用を進めています。その一つが住宅や店舗への町産木材活用補助。町内で新築住宅を建築し、町産木材を使用した場合、最大250万円を補助。また店舗を新築する場合は最大100万円（他補助との併用で最大400万円）を補助します。

公共施設にも積極的に町産木材を活用。役場は町産木材を100％使用した木造庁舎（暖房に木質バイオマスボイラーを使用）。公民館まとまーるは97％、くるみなの木遊館（11ページ参照）、子育て総合センター、公営住宅にも積極的に町産木材を活用しています。木の香りと温もりを感じながら、利用できる空間であり、「木育と林業のまち」を具現化したシンボルでもあります。

木材をブランド化し、持続的な森林経営を支援するために、適切に管理された森林を、第三者機関が認める「森林認証制度（SGEC）」。町産木材活用の要となる当麻町森林組合は、この制度の認証事業体となっており、当麻町の民有林の多くが認証森林となっています。

当麻町の取り組みに共感し、日本郵便㈱が令和5年、町産木材を活用した当麻郵便局を新築。役場庁舎と同様に木質バイオマスボイラーを使用し、太陽光発電も設備した局社は、環境配慮型郵便局「＋（プラス）エコ郵便局」として、北海道では初めて導入された建物となっています。

花育

四季の移ろいの中で
花の彩りと香りを感じ
その命に触れる

米や野菜とともに、良質な当麻の農産品として知られる花き類。昭和20年代から始まった花き栽培は稲作、畑作と同様、日々の生産者の研さんにより、今に続いています。

〝花のまち〟といっても過言ではない当麻町。暖かな季節を迎えると町内は、「花と緑のまちづくり推進協議会」をはじめとした町内団体による花壇整備などにより、美しい花で彩られます。身近にある花を通じて美しさを生む命を知っていただくことが当麻の進める「花育」です。

真っ白な雪で覆われた大地から土の香りが漂うようになる頃、一部のハウスでは開花調整をするための「電照栽培」が始まり、春の闇夜を灯します。同じ頃、大地には小さな花が芽吹き、モノクロの大地を色付けはじめます。私たちは北海道ならではの四季の移ろいを〝季節の使者〟である花により感じています。

幼い芽は、つぼみとなり、一輪の花を咲かせる。これは花が生きているという証し。そしてその彩りと香りは人に安らぎを与えてくれる。花の命とは「優しさ」であると当麻町は捉えています。当麻町の花を通じて、その命を感じていただきたいと願っています。

くるみなの庭

〝美しい花や自然を五感で感じてほしい〟。そんな願いから花育の拠点「くるみなの庭」は生まれました。

当麻山の麓にある〝ファミリーガーデン〟くるみなの庭には100種以上の花が咲きます。その全てが多年草植物。同じ株から毎年、花を咲かせる多年草は春に芽を出し、夏に花を咲かせ、秋には次の年に向けて休息をとります。1年をかけて変化する姿は「花が生きている」ということを教えてくれます。

くるみなの庭のコンセプトは「発見・冒険・体験・創造・好奇心」。ガーデン内には、山の麓という地形を生かし小高い丘や、その下を通るトンネル、背の高さまで伸びるグラス迷路、ツリーハウスなどを整備しています。かけっこ、かくれんぼ、昆虫採集…、子どもたちが自由な発想で遊べる場でもあります。さらにクライミングウォールも設置。スタッフが常駐しているので安心してボルダリングを楽しめます。

美しい花や自然の中で遊ぶことにより、豊かな感性が育つと考えます。季節を通して訪れ、花の生命に気づくことは優しさや思いやりの心が養われると考えます。大人も美しい景観の中、子どもが元気に走り回る姿に心癒されます。時には童心に返り思い切り遊ぶことも良いかもしれません。くるみなの庭は子どもも大人も笑顔になる場所です。

ここでは実をつける植物も育てています。ぜひ摘み取り、その味わいを感じてください。また多年草であるため花を摘み取ることもできます。目で花の美しさを感じ、耳で風にそよぐ花の唄を感じ、肌で花の柔らかさを感じ、口で実りの味を感じ、鼻で香りを感じる。五感をフル活用して花や自然を感じてください。（営業は午前9時～午後5時。入場料無料。冬期間は休業）

花育

優しい心を育む

目で感じる花の美しさ、鼻で感じる香り、手で感じる花びらの触感…、花から受ける感覚というのは老若男女問わず、誰しもが感じ得るもの。幼い頃から花に触れあうことは貴重な体験になると考え、当麻町はお子さんが花に触れる機会を積極的に提供しています。

お子さんが生まれて初めて迎える1歳の誕生日。町長が薔薇の花束と絵本、似顔絵の入ったフォトフレームをプレゼントに、お子さんのもとを訪れます。バラは当麻町産。フォトフレームは町産木材を使用して、くるみなの木遊館が製作。似顔絵は当麻町を中心に活躍する「よこおまき」さんが手がけています。香(かぐ)しいバラとともに素敵な誕生日が訪れ、すくすくと育ってほしいという願いを込めた当麻町からの〝お祝い〟です。

バラと絵本のプレゼントは、1歳の誕生日だけでなく、6歳の誕生日まで継続。さらに子どもの読書活動を推進する当麻町は、小学1年生から中学3年生の誕生日に毎年、本をプレゼントしています。

バラの花束は、愛情たっぷりにお子さんを育てているご家族への感謝の気持ちも込めています。その花言葉である「美・愛情」のとおり、これからも愛にあふれたご家庭であることを願っています。

町内小中学校においても、カリキュラムの中で、花育の授業を実施。小学校ではカーネーション栽培農家の協力を得て、子どもたちが花を収穫し、感謝の気持ちを書き留めたメッセージカードを添えて保護者に贈る活動。中学校では生産農家を講師に、栽培の厳しさや楽しさから、仕事と向き合う姿勢を学ぶ授業を行っています。

花の命の優しさを子どもたちが感じ取り、大人へつながり、優しさの輪が当麻町全体に広がっています。

花育と農業

花き栽培

ピングしたもの。バラの産地といえば温暖な地域ですが、高温多湿を嫌う特性上、夏季の出荷は全国的に減少します。当麻町はバラを夏季に栽培。これは北海道の夏が、本州と比べ湿度が低く冷涼であるため。寒暖差のある気候により生産される美しいバラは「夏バラ日本一」と呼ばれ、市場から高い評価を得ています。

町花に制定されている菊は、終戦後から栽培を開始。生産者の努力と高い栽培技術は脈々と引き継がれ、北海道でも屈指の品質と生産量を誇っています。

ＪＡ当麻が出荷するバラ、菊、カーネーションなどの花は「大雪の花」というブランド名が名付けられています。開拓、戦争という厳しい時代を乗り越えて、先人がスタートさせた花の栽培。労苦を癒したであろうその優しさは今に生き、花育の根幹となっています。

先述の花植栽活動は、「花工房比呂」店長の中島大智さんが中心となり、〝美しい街並みを〟という思いのもとボランティアで行われています。花の命に癒され、心を豊かに育む花育活動は、生産者、商工業、町民皆さんの思いやりによって行うことができています。

花が咲く季節になると、各団体が町内の至る場所で花の植栽を始めます。町民有志のボランティア「花と緑のまちづくり推進協議会」による道の駅花壇の花植え、商工会青年部による市街地の花プランター設置、老人クラブによる花壇整備…。花育の町らしく町内は、鮮やかな花で彩られます。町花(35ページ参照)を制定しているとおり、当麻町は花の産地。多くの方が花育活動に携わっています。

前ページでご紹介したバラの花束は、町内の生産者が栽培したバラを、町内の花屋「花工房比呂」がラッ

笑顔になるまち

子育て支援

「食育 木育 花育」はまちづくりの柱であると同時に、子育て支援の柱でもあります。現代社会を生きていくお子さんにとって、命をとおして豊かな心を育むことは重要な子育ての一つと当麻町は考えています。

楽しいこと、つらいこと、うれしいこと、悲しいこと…さまざまな経験をとおして成長することは、お子さんにとって大変なエネルギーを使うことであり、ご家族にとっては楽しみな反面、心配な面もあることでしょう。当麻町は保護者の方のご負担をできるだけ軽減して、充実した子育てライフを送れるようさまざまなサポートをしています。

当麻町は子育てのワンストップ窓口として「子育て総合センター」を整備。子育てに関するサポートの他、行政サービスなどの受け付けを一括して行っています。施設内にある「地域子育て支援拠点たっち」では、乳幼児のいる親子を対象に子育て講座やあそびの場を提供。子ども同士、親子同士の交流の場となっています。また「子育て世代包括支援センター」も設置し、保育園や学校など関係機関と連携することで、妊娠前からお子さんが巣立つまでシームレスな支援を行っています。

予防接種、病院、入園入学費用、学費など子育ては非常にお金がかかるもの。当麻町では0歳から18歳までの医療費無料化、一部予防接種の助成などお子さんの健康に関する費用の助成の他、3歳から5歳児の給食費無料(幼稚園の預かり保育のみ有料)、小中学校修学旅行費の全額補助、高校生への補助など、お子さんが親元を離れるまでの、保育や教育にかかる費用を支援しています。さらに当麻町を含む近隣市町村に就職した若者(当麻町民に限る)に対し、大学などに通うために借りた奨学金の返済も支援しています。

教育

情報技術の発達やグローバル化により大きく社会は動き続けており、今後、時代がどのように進むのかは誰も予測できません。変動し続ける社会の中、子どもたちが自身の可能性に自信を持ち、多様な能力を持つ他者と協働しながら、未来社会の創り手として育っていただきたいと考えます。子どもは〝未来の卵〟。当麻町では、ご家庭、地域と協力し、多様な教育によりお子さんを大切に育てます。

町内の教育機関は、小学校2校(令和8年度からは1校)、中学校1校です。子育て機関とも連携し、幼小中連携や小中一貫教育を推進しています。

お子さんが一日の大半を過ごす学校。より良い環境の中で学習活動が行えるよう全校にエアコンを完備。また近年主流化しているギガスクールに対応すべくインターネット環境を整備し、さまざまなニーズに合わせた学習機会の提供をしています。

お子さんの心はもとより、さまざまな事情が複雑に絡み合ういじめや不登校問題。これらに適切な対応をするべく、当麻町はスクールソーシャルワーカーを採用。前述と同様に子育て機関、学校が密に連携し、学校に通うお子さんが生活の中で抱えているさまざまな問題の解決を図っています。虐待やヤングケアラーなどの問題に関しても、お子さんと寄り添うことを第一に対応します。

学習活動はお子さんだけのものではありません。当麻町は幅広い年齢層が、さまざまな体験、学びができる「生涯学習」を推進しています。

住民皆さんが、学習機会を通じて、心豊かに日常を過ごせるように、「心を育てる食育 木育 花育」のまちづくりコンセプトに基づき、当麻ならではの地域資源を生かした学習を進めています。

笑顔になるまち

健康づくり

老いも若きも、心豊かな人生を送るためには、健康であることが何より大切。当麻町は医療、保健、福祉、介護などそれぞれの分野が密に連携し、住民皆さんの健康管理を行っています。

健康であるためにまず重要なのは、一次予防(生活習慣の改善、健康教育、予防接種などの病にかからないように施す処置や指導)。当麻町は温浴施設ヘルシーシャトー(33ページ参照)横に保健福祉センターを整備。保健師が出向き、各種健診、健康相談、健康に関する教室を開催しています。また施設内の運動器具を定期的に開放するなど、ニーズに合わせた予防策の提供をしています。

病気を未然に防ぐためには、自らの体が発する警告に、早期に気づくことが大切です。そのためには健康診断や各種検診を定期的に受け、医師の適切な診断を受けることが必要。

当麻町は保健師が訪問活動や電話により、特定健診など各種検診の受診勧奨を行う他、特に早期発見が重要であり、そのきっかけとなるがん検診においては、一定の年齢の住民に対し、無料クーポン券を発行するなど受診率の向上を図っています。

全世界で未曽有の災害となった「新型コロナウイルス感染症」。予防接種の重要性があらためて見直されています。当麻町はさまざまな予防接種の助成などを行っています。各種予防接種により発症予防や重症化予防を図っています。

町立診療所は、町民が安心して健康に過ごせるよう、医療体制の確保を図っています。適切な処置で、病気を未然に防ぐことはもちろん、町民皆さんが利用しやすい〝まちのかかりつけ医〟であることが大切であると考えています。病診連携や通院患者の送迎など、きめ細やかなサービスを心がけています。

福祉・介護

年をとっても、住み慣れた地域で、安心して暮らしたいというのは誰もが望むこと。幅広い年齢層の方が、当麻町で自立した生活を送っていただけるよう、きめ細やかな福祉サービスを行っています。

核家族化が進む中、年齢を重ねると心配になるのが、〝在宅で日常を過ごせるか？〟ということ。当麻町は地域支援包括センターを役場内に設置。適切な介護支援が受けられるよう援助をしています。

高齢になると日常生活において、さまざまな不安要素がつきまといます。その一つが交通問題。当麻町はJRやバスなど公共交通機関が揃っていますが、都心部と比べると本数が圧倒的に少ないのは否めません。運転免許を返納し、自家用車を手放した後も安心した生活が送れるように、ハイヤー料金の助成、買い物外出支援サービスなどを行っています。さらにきめ細かなニーズに合わせデマンド交通の導入も予定しています。

北海道に住むには必ず冬期間の除雪問題がつきまといます。力仕事となる除雪は大きな負担となります。除雪が困難な方に対し、有料となりますが、住宅敷地内の生活路の除雪サービスを行っています。

障がいのある方も、それぞれのニーズに合った適切なサービスが受けられるよう相談支援体制を強化し、安全安心なサービスが受けられるような環境づくりを進めています。

福祉の推進に当たっては、地域の方の支え合いが重要です。各地区にいらっしゃる民生児童委員、町内会の皆さん、社会福祉協議会などと連携をとり見守り活動を進め、生活課題の早期発見と解決に務めています。

健康推進と合わせ、小さなお子さんから高齢の方まで安心して暮らし、障がいのある方もない方もお互いが支え合う地域を目指しています。

笑顔になるまち

文化・スポーツ

新型コロナウイルス感染症の拡大とともに、団体による文化・スポーツ活動は大きく制限されました。文化やスポーツに勤しむことは、心に潤いを与え、豊かな人生を送るためには大切なこと。当麻町はアフターコロナを念頭に、住民個々の志向を尊重し、文化やスポーツにより、充実した日常が送れるよう応援します。

毎年11月3日(文化の日)には、当麻町最大の文化の祭典「生涯学習フェスティバル」が開催されます。町内の団体、サークル、学校などが作品展示、ステージ発表により日頃の文化活動を披露。誰でも参加できるこのイベントは、文化活動の交流の場であり、新たな文化機会を生み出す場にもなっています。

昭和44年に設立した「当麻町文化連盟」は、町内のサークルが構成する文化組織。加盟サークルの発表の場の提供や、コンサートの開催など、町民への文化機会の提供を積極的に行っています。

多機能なホールを有する当麻町公民館まとまーるは、町民の文化活動の拠点です。さまざまなサークルが活動で利用しています。平成26年の完成と同時に町民によるボランティア組織「文化事業実行委員会」が立ち上がりました。公民館まとまーるで町民に文化芸術鑑賞の機会を提供することを目的に毎年、著名人を呼んでの講演会や落語、コンサートなどを開催しています。

かつて「スポーツ活動日本一」と看板を掲げた歴史がある当麻町は、スポーツセンター、野球場、多目的運動場とさまざまな施設を整備し、各団体が大会、イベントを開催。また昭和34年に設立された当麻町体育協会には町内のスポーツサークルや少年団などが加盟。教育委員会が任命する体育指導委員と連携して、運動機会の提供を積極的に行っています。

安全・安心

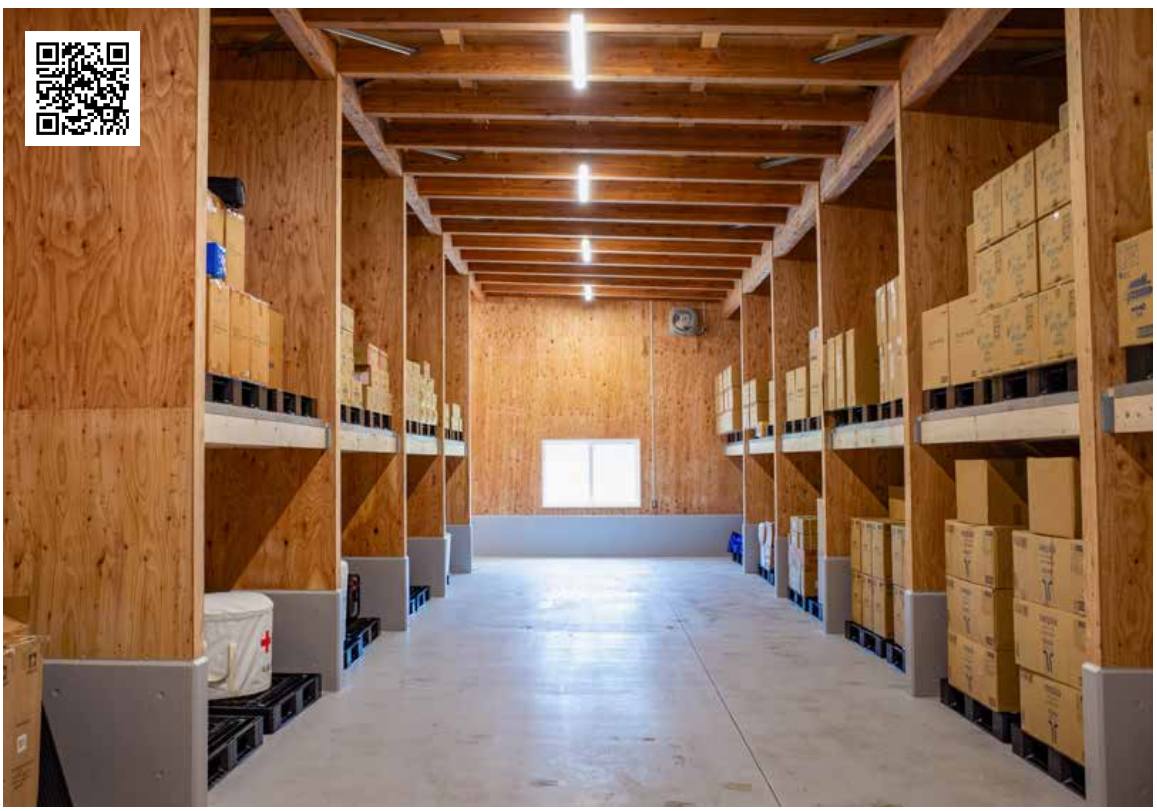
東日本大震災、胆振東部地震、能登半島地震といった大規模地震、また近年の異常気象による大雨被害など私たちの生活を脅かす自然災害が多発しています。胆振東部地震では、北海道全域でブラックアウトとなり当麻町民も、自然災害の恐ろしさを身をもって経験しました。いつ起こるかわからない災害に備え、当麻町は住民皆さんの安全安心のために、対策を進めています。

当麻町は、比較的自然災害の多くない町ですが、これまで数度、豪雨による河川氾濫を経験しています。河川の改修はもちろん、令和元年に洪水ハザードマップを製作し、ホームページへの掲載とともに各戸に配布。日頃からの災害意識の向上に努めています。

大規模の災害時には流通が途絶え、日常生活に大きな影響を及ぼす可能性があります。令和6年、指定避難所である当麻中学校、くるみなの木遊館がある高台の町有地に防災備蓄品保管倉庫を整備しました。食糧や生活必需品、発電機などの他、冬期間での災害も想定した備蓄品を保管し、〝もしもの時〟の住民皆さんの安全安心を確保しています。

当麻町は1年間の約4分の1が雪に覆われます。雪のない時期と比べ降雪期は圧倒的に交通の利便性が低下します。除排雪の体制を万全に整えて交通の確保を心がけています。

町内全域にケーブルネットワークを整備。この情報インフラを活用し、災害時には町内10地点に設置した屋外スピーカーからの情報伝達や、コミュニケーションアプリ「LINE」を活用した(令和6年度整備予定)発信を行います。またホームページを基軸に、フェイスブック、X(旧ツィッター)、インスタグラムといったSNS上でもきめ細やかな災害情報の発進を行っています。



防災備蓄品保管倉庫の内部

笑顔になるまち

商工業

農林業が基幹産業の当麻町ですが、商工業無くして、町の発展はありませんでした。当麻町の商工業は屯田兵による開拓時に兵屋の建築、基盤整備などを行ったのが起源。鉄道の開通とともに発展し、その技術が継承されながら今に至ります。現在は当麻町商工会が中心となり、健全経営の促進に努めています。

当麻町は町内で事業を営む経営者を強力にサポート。店舗の新築・増改築の補助(最大300万円)、店舗の小規模改修への補助(最大100万円)、機械導入の助成(最大75万円)などを行っています。

後継者不在によりやむを得ずその歴史を閉じる事業者に対しても、その後の新規開業につなげるため、店舗や事業所として譲渡する場合に奨励金(一律100万円)を支給します。

商業の活性化には、地域に根付き商工業を営んできた企業はもちろん、夢を抱き開業する新規出店者への応援も大切。移住開業者には、先述の商工業振興補助に加え、「移住開業者チャレンジ支援事業補助金」も設け、新規開業者へ引っ越しなどにかかる費用(最大30万円)を補助。空き家、空き店舗の解消にもつながっています。

商工会メンバーは自主的に、町を盛り上げようと、町の広報担当とタッグを組み「ひるとうま　よるとうま」を企画。ユーチューブ動画にて町内の飲食店や店舗を面白おかしく紹介しています。また商工会の次代を担う「当麻町商工会青年部」、農業の次代を担う「当麻農協青年部」、町内の若手異業種が集まり「当麻町青年会議」を組織。ボランティア活動や、冬のキャンドルイベント開催などで町を盛り上げています。

行政主導ではなく、住民自らがまちづくりに参画する姿が、より輝く明日の当麻町を創っていきます。

そうだ！
当麻に住もう
新築住宅への
町産木材補助
最大 250 万円
中古住宅購入後の
除去と建替補助
最大 450 万円
好評分譲中！
ハートフルタウン
とうま
NEW TOWN TOHMA
ニュータウンとうま

くるみなの森

人が集い、笑顔になる
笑顔が集まる森
くるみなの森

市街地からさほど離れていない場所に「当麻山」はあります。標高263メートルと非常に小さな山ですが、自然にあふれ、その環境を満喫できる施設が整備されています。私たち当麻町民にとって当麻山は幼い頃から慣れ親しんだ「里山」。この山で遊び、自然を学びました。

〝これからも当麻山にたくさんの人が訪れ、笑顔あふれる場所であってほしい〟。そんな願いを込めて、当麻山の愛称を「くるみなの森」と名付けています。クルミナはアイヌ語に由来しており、クルは「人」、ミナは「笑う」を意味します。訪れた方が笑顔になる場所であってほしいと願っています。さらに〝くるみな〟はその読み方から〝みんなが来る(来る皆)〟という意味も持っています。多くの人でにぎわい、笑顔のあふれる場所、それが当麻山「くるみなの森」です。

当麻山の麓にある木育拠点「くるみなの散歩道」と「くるみなの木遊館」(ともに11ページ)、花育拠点「くるみなの庭」(17ページ)の名称もくるみなの森に由来したもの。町民の心のふるさとである当麻山は「食育 木育 花育」の体験活動の場としても活用されています。

展望台

くるみなの森を1周する、くるみなの散歩道は当麻山の登山道にもつながっています。徒歩20分ほどの登山道は、樹木が生い茂り、さわやかな汗をかきながらの軽登山を楽しめます。秋は当麻町お勧めの紅葉スポットでもあります。

登山道の終着点には町の景観を一望できる展望台があります。四季折々の表情を見せる当麻町の街並みをぜひご覧ください。秋が深まった早朝には、雲海を望むことも可能です。冬期間は閉鎖していますが、有料でスノーシューによる登山体験も行っています。（入場料無料）

フィールドアスレチック

くるみなの森の中にあるフィールドアスレチックでは、自然を感じながらのびのびと遊ぶことができます。30種類のポイントは、緑の中に馴染むよう丸太やロープ、ネットなどシンプルな材料でできています。非常に簡単なものから、非常に難易度の高いものまで、さまざまなコースを用意。幅広い年齢層にお楽しみいただけるように設定しています。またポイントそれぞれに、当麻にちなんだ名称が名付けられているのも特徴です。（営業時間は午前9時～午後5時。冬季休業。入場料は大人600円、子ども400円）

キャンプ場

自然の中で楽しむアウトドア。アウトドアと言えばキャンプ。くるみなの森の中にあるキャンプ場は、存分に自然を満喫しながらアウトドアも楽しめるエリアです。炊事場やトイレも設置しているので安心。バーベキューハウスでは大人数での焼き肉も可能です。また真向かいには温浴施設「ヘルシーシャトー」もあるのでお風呂の心配も無用。マットや毛布の貸し出しも行っています。冬期間は冬キャンプ場としても開放しています。（使用料など詳しくは当麻町観光協会のホームページをご覧ください）

パピヨンシャトー

くるみなの森の中にある「世界の昆虫館パピヨンシャトー」では、世界中から集めた昆虫の標本1万点を展示しています。ネーミングのとおり蝶の標本は特に充実しており、中には希少価値の高い標本も…。鮮やかな色合いや特徴的な形は、自然界で生き抜くために必要なものであり、その説明も詳しく表記されています。また館内には生態観察室も備えており、生き生きと暮らす昆虫の姿を間近に観察できます。（営業時間は午前9時～午後5時。冬期間休業。入場料は大人600円、子ども400円）

龍伝説

天空を駆ける２頭の龍が
災いから村を守った
当麻に残る龍伝説

―大雪山には、さまざまな神様が住んでいましたが、その中にはおそろしい魔神もいて、村びとをこまらせるのでした。魔神は、くろ雲をわきおこしてあらわれます。稲妻が光って、ものすごい嵐となるのです。この災難のたびに村びとは丘の上にひなんして、ふるえているよりほかにどうしようもありません。

石狩川ははんらんし、せっかく作った田んぼは海のように波だっています。「米がとれなければ来年は、なにを食ったらいいのだ」。村びとたちは空をあおいで、ため息をついていました。「あばれんぼうの石狩川をむこうにおしやって、おとなしい川がこちらにほしいなあ」。

とつぜん二頭の龍がたかだかと空へまいあがり、ゆっくりちかづいてきた。石狩川をまっ二つに割ると、川の水は遠くの方へにげていった。

あたらしく生まれた当麻川と牛朱別川がきらきら光って、そのまわりには豊かな土地がしだいにあらわれてきました。

「きっとあの龍は、この村を守ってくれている」。村びとたちはそう信じて、一生懸命はたらきました。だから村はどんどん豊かになりました―

（絵本「蟠龍伝説」より一部抜粋）

当麻鐘乳洞

北海道指定天然記念物である当麻鐘乳洞は昭和32年、石灰岩発掘中に発見されました。洞内が2頭の龍が横たわっているように見えたことから〝龍の休むところ〟を意味して、当時「蝦夷蟠龍洞」と名付けられ、これを機に龍にまつわるものが生まれてきました。1億5千万年前から形成されていると言われている全長約135㍍の洞内には、学術的に希少価値の高い管状鍾乳石(マカロニ鍾乳石)など、さまざまな鍾乳石を見学できます。(営業時間は午前9時～午後5時。冬季休業。入場料は大人600円、小中学生400円)

郷土芸能

町内には、龍にちなんだ郷土芸能があります。昭和47年に発足した「当麻蟠龍太鼓」は和太鼓の演奏団体。〝昇龍〟や〝龍神〟といった龍にまつわる曲目と、龍の面を被った演者が大太鼓をたたく姿が特徴で、町内外のイベントで勇ましい演奏を披露しています。

平成4年に発足した「当麻蟠龍隊」は、長崎くんちの〝龍踊り〟をルーツにした龍踊り団体。操る龍は藍色にアイヌ文様を基調とした全長20㍍の龍で、ドラや爆竹といったにぎやかな打楽器のリズムに合わせ、勇壮に舞う龍の姿を再現します。

蟠龍まつり

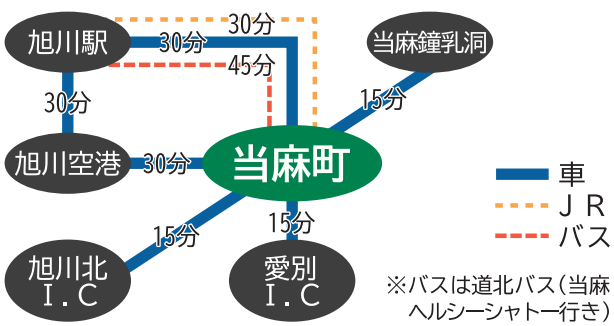
毎年、8月第1週の日曜日に、当麻最大の夏イベント「蟠龍まつり」が行われます。当麻鐘乳洞のキャラクター〝りゅうたくん〟のぬいぐるみと入った玉の数を競う玉入れ大会や、ふるさとの唄〝当麻音頭〟に合わせて来場者が、龍の描かれた法被を着て踊る〝千人踊り〟、そして蟠龍太鼓の演奏と当麻蟠龍隊の龍踊り…など名前のとおり、龍にちなんだ催し物が目白押しです。

りゅうたくん

龍乃泉

日本酒「龍乃泉」は、官民協働の取り組みにより平成29年に誕生した新たな特産品です。このお酒のために町内の米農家が栽培した酒米「彗星」を原料に、旭川市の老舗酒蔵「高砂酒造㈱」が造った純米大吟醸酒。最大の特徴は当麻鐘乳洞で熟成させているという点。生酒の状態で洞内に搬入し、2月から4月の約2カ月間熟成。高砂酒造にて火入れされた後、販売されます。洞内の搬入搬出は町民ボランティアが担います。本数が限られていることから、町内の酒類販売店およびふるさと納税返礼品のみで取り扱う希少なお酒です。

①当麻町役場(☎0166-84-2111)
②公民館まとまーる(☎0166-84-2111)
③農村環境改善センター(☎0166-84-2123)
　町立図書館(☎0166-84-2566)
④スポーツセンター(☎0166-84-5008)
⑤町民プール(☎0166-84-5567)
⑥運動公園広場テニスコート(☎0166-84-5008)
⑦子育て総合センター(☎0166-84-5440)
　当麻幼稚園(☎0166-84-3250)
⑧ふれあい交流センター輝き(☎0166-84-2325)
⑨田んぼの学校(☎0166-84-2111)
⑩町立診療所(☎0166-84-2335)
⑪武道館(☎0166-84-2739)
⑫郷土資料館ここから(☎0166-56-1123)
⑬大雪消防組合当麻消防署(☎0166-84-2135)
⑭当麻小学校(☎0166-84-2020)
⑮道の駅とうま(☎0166-58-8639)
⑯宇園別小学校(☎0166-84-3813)
⑰当麻中学校(☎0166-84-2072)
⑱くるみなの木遊館(☎0166-84-2882)
⑲フィールドボール場(☎0166-84-2587)
⑳ヘルシーシャトー(☎0166-58-8112)
㉑町営野球場(☎0166-84-3163)



※バスは道北バス(当麻ヘルシーシャトー行き)

㉒パークゴルフ場(☎0166-84-3900)
㉓総合グラウンド(☎0166-84-3163)
㉔とうまスポーツランドテニスコート(☎0166-84-3163)
㉕グリーンヒル運動場(☎0166-84-2123)
㉖くるみなの庭(☎080-5646-9798)
㉗くるみなの散歩道
㉘フィールドアスレチック(☎0166-84-3163)
㉙キャンプ場(☎0166-84-3163)
㉚パピヨンシャトー(☎0166-84-2001)
㉛当麻山展望台
㉜当麻山スキー場(☎0166-84-2698)
㉝当麻鐘乳洞(☎0166-84-3719)
㉞グリーンリーフ当麻パークゴルフ場(☎0166-36-7890)

ヘルシーシャトー

くるみなの森(当麻山)麓にある温浴施設です。長万部二股ラジウム温泉の天然石灰華（湯の華）を用いており、湯冷めしにくい、やわらかな泉質を再現しています。気泡浴、圧注浴、サウナ室も完備。また休憩室、研修室も備えています。食事処も併設。施設のエリア内には、スポーツ・観光施設があるので、汗をかいた後にご利用いただくのもおすすめです。（営業時間は午前10時～午後10時。利用料は町内大人６００円、町外大人７００円、町内小中学生３００円、町外小中学生４００円※入館は午後９時まで）

パークゴルフ場

A～Dの4コース全36ホールの本格的なパークゴルフ場です。山の傾斜に設計されたA～Cコースは、打ち上げ、打ち下ろしなどパワーの調整やショットの正確さが問われる戦略性の高いコース。開放感あるDコースも起伏に富んだ油断できない設計で、初心者はもちろん上級者まで楽しめます。冬期は天然芝のグリーンリーフ当麻パークゴルフ場をご利用ください。（営業時間は午前８時～午後６時。ただし９～10月は午後５時まで。冬期休業。利用料は町内大人４００円、町外大人６００円、子どもは町内外ともに３００円）

当麻町について

町民憲章

当麻町民憲章は昭和47年6月6日、開基80年の記念に制定されました。「家庭生活」、「産業振興」、「社会生活」、「文化と教育」、「自然と郷土」の5項目について掲げられています。

わたくしたちは、当麻町民であることに誇りと責任を持ち、先人のたくましい開拓精神をうけつぎ、この憲章をかかげて、実践につとめます。

一　祖先をうやまい、
　　楽しい家庭をつくりましょう
一　からだをきたえ、
　　元気で仕事にはげみましょう
一　きまりを守り、
　　たすけあいの心を育てましょう
一　文化を高め、
　　明るい未来を築きましょう
一　自然を愛し、
　　豊かな郷土をつくりましょう

町章

昭和43年、北海道100年を記念して制定されました。当麻の「当」を図案化し、星は屯田兵の開拓魂と未来への活躍を意味しています。また円は町の和と団結を表徴しています。

地名の由来

当麻町は明治26年5月10日、永山村字トオマに、屯田兵により開拓の鍬が降ろされ、歴が始まりました。トオマの地名は、アイヌ語の「ト(沼)・オマ(に入る)・ナイ(川)」から由来しています。町内は石狩川、牛朱別川、当麻川、清水川といった河川が流れていますが、大昔は川の氾濫により、至る場所に沼や湿地があったといわれています。

位置と面積

〝北海道の屋根〟といわれる大雪山連峰の麓、東経142度50分、北緯43度82分に位置しています。北海道の穀倉地帯といわれる上川総合振興局管内のほぼ中央、東側は山伝いに上川町、愛別町、北側は大雪山系に源を発する石狩川に沿って比布町と隣り合い、南西は北・北海道の拠点都市　旭川市に接しています。面積は東西が17．3㎞、南北は13．5㎞

北海道当麻町長　村椿哲朗

当麻町は可能性に満ちた町です。「食育・木育・花育による当麻町ならではのまちづくり」、官民連携の力。20年後も夢を語り合える当麻町であり続けられるように。子どもたちに胸を張って引き継げる当麻町であり続けられるように。継続と進化、受け継がれる開拓魂を胸に挑戦してまいります。

に及び、総面積は204.90平方km を有しています。

地形と地質

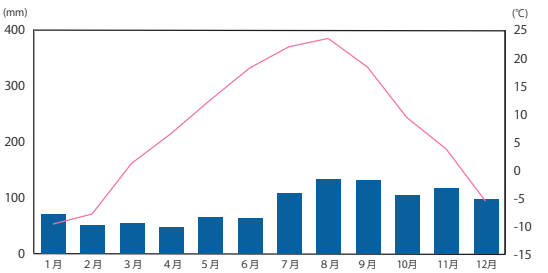
山と河川に囲まれ、南西部から北にかけて山林地帯を形成。自然の丘陵が起伏しながら大雪山連峰に連なっています。河川は、北側に石狩川が流れ、さらに広大な町有林内に源を発する牛朱別川、および当麻川が町の中央部に流れ、その流域に肥沃な平坦地が開かれています。地質構成は平坦地の大部分が埴質壌土で、石狩川に沿っては沖積土、砂質壌土となっており、丘陵地帯はおおむね埴質壌土です。東方面は礫壌土で、まれに火山灰地があります。

所有別	面積
田	3,892ha
畑	922ha
宅地	398ha
山林	12,355ha
その他	2,913ha
合計	20,490ha

土地面積の状況
(令和６年１月１日現在)
資料：土地概要調書より

気象

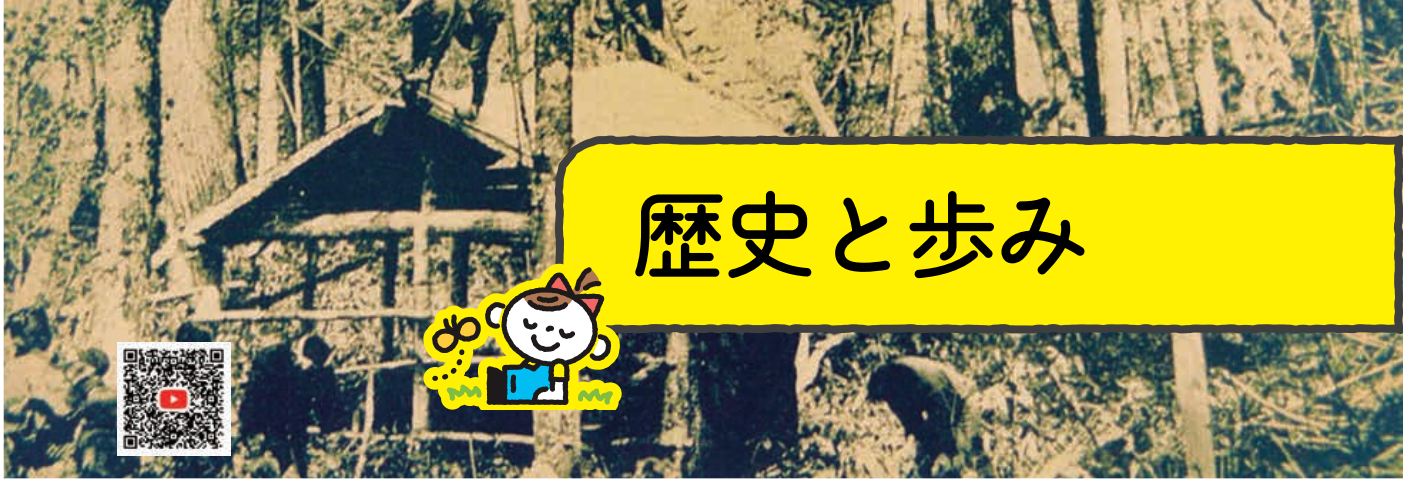
当麻町が属する上川地方は、盆地という地形上、独特の内陸的気候であり、寒暖の差が大きいのが特徴です。夏は30度を超える日があり、冬も厳寒期にはマイナス30度まで下がることがあります。３月上旬頃から融雪が始まり、７～８月頃が最も高温となりますが、８月中旬頃から次第に下降。11月に初雪、12月末には根雪となります。風向きは夏季は西風が多く、冬季には北風が多くなり、激しい吹雪の日もあります。



平均気温と降水量(2023年)
資料：旭川地方気象台

町花・町木

町花は菊、町木はイチイと昭和57年３月に開基90周年を記念し町条例で制定しました。町民アンケートで意見の多かったものが選定されましたが菊は当麻町を代表する農産品、イチイは町民になじみ深い樹木です。



歴史と歩み

開拓の歴史

北海道の開拓と警備を目的とした屯田兵が、永山村字トオマに初めて開拓の鍬を降ろしたのは明治26年5月10日。広島、山口両県から101戸が先陣入りし、その後400戸となりました。用意された広さ16・5坪、板の間と土間の他に二間という質素な作りの屯田兵屋を母屋に家族全員で開墾にあたりました。現在の中心地(市街、中央)および北星地区から開拓がはじまり、明治27年頃からは宇園別、伊香牛地区がほぼ追給地として開拓されています。東旭川村に属していた東地区は明治38年から開拓がはじまり、大正4年に当麻へ編入されました。また緑郷、開明地区は昭和20年から戦後開拓として入植が始まりました。

村から町へ

町制施行記念式典(昭和33年)

永山村に属していたトオマは明治33年、屯田兵現役終了と同時に分離され「當麻村」となりました。漢字表記は屯田兵が麻作りを奨励しており、麻がよくとれる土地だったことから〝麻が当たる〟という意味で名付けられたといわれています。さらに昭和32年12月、北海道議会において當麻村の町制施行が決定。昭和33年4月1日に「当麻町」が誕生しました。

交通

当麻駅開業(大正11年)

開拓当時、隣町の愛別町との境には渡船場および駅逓があり、水陸交通の要地でした。明治22年から現在の国道39号線が起工され宇園別地区、伊香牛地区につながっています。鉄道の開通は当時の切実な願いであり、明治45年に旭川開発期成会が掲げた旭川―野上間鉄道敷設(後のJR石北線)が當麻村を通過するか否かは、今後の発展を左右する大きな課題となりました。旭川分岐を求める東旭川村・東川村・當麻村と比布分岐を求める比布村の間の激しい争奪を経て、大正9年に旭川分岐(新旭川駅)が決定。大正11年11月に愛別駅まで開通し、当麻には当麻駅、伊香牛駅が開業しました。

農業

昭和初期の水稲栽培の様子

開拓当初、自家用として栽培した少量の野菜、豆、蕎麦、小麦の栽培が当麻農業の起源といわれています。現在の当麻農業の主力である米は当時から栽培が行われていたという説がありますが、あくまで試験的であり量もごく少量でした。試作3年目にしてようやく約30kgの収穫をあげ、當麻村における水稲が有望だと

認められました。明治32年には260㌶を開田し、33年、42年の大規模な灌漑工事により約1130㌶において約277万5千kgを収穫できるまでに至りました。凶作や2度の大戦下での不況と供出など厳しい時代を乗り越え、北海道随一の米生産地に育っています。

林業

当麻の木材は、開拓前から兵屋建設の材料として利用されていました。上川地方において、林産物として活用されるようになったのは移住者が増え始めた明治30年代からといわれています。当時の需要は角材、丸太、薪などでしたが、大正初期にかけて建築材、電柱材、枕木など、時代の発展とともに発展しました。

商工業

当麻駅につながる市街地道路典(昭和33年)

屯田兵入植時、すでに本村である永山には商工業が発展していましたが、それでは足りず、荒物業を当麻に開業したことが商業の始まりとされています。明治33年の屯田兵役終了とともに土地の売買が可能となり、さらに当麻における米栽培の黎明期であったことから、徐々に開業が始まりました。大正11年の鉄道開通も発展の大きな助力となりました。

学校

学校給食の様子(昭和39年)

屯田兵の家族には、学齢期の児童も相当数いたといわれています。これを予測し、兵屋建築とともに学校校舎の建築が進められていました。当麻における初めての学校である南北両小学校(現在の当麻小学校)が開校したのは開拓と同じ明治26年9月です。伊香牛小学校(平成17年閉校)は簡易教育所として明治34年に開校、宇園別小学校は同じく簡易教育所として明治36年、北星小学校(平成15年閉校)は当麻尋常高等小学校北分教場として明治41年、東小学校(昭和43年閉校)は東旭川村当麻教育所として明治43年、開明小学校(平成19年閉校)は当麻尋常高等小学校所属熊の沢特別簡易教授場として昭和8年、緑郷小学校(平成10年閉校)は北星小学校緑郷分校として昭和22年に開校しています。当麻中学校は当麻小学校と校舎併用する形で昭和22年に開校しています。

消防組織

明治42年、宇園別で大火があったことがきっかけとなり、有志の発起で腕用ポンプを購入し、私設消防組を組織したことが消防組織の起源となっています。その後、市街地においても、街の発展に伴い火災の危険が増したため、明治44年に有志により私設消防団が創立しました。二組の消防組は大正3年に公設消防組として認可されています。大正10年から消防団の無い地域において、それぞれ設消防団が設立されはじめ、公設となり、現在は各地区ごとに計6分団の消防団が組織されています。

郷土資料館ここから

当麻の歴史文献や資料を収蔵している「郷土資料館ここから」。この建物は初代役場庁舎として大正15年に建築されたものです。当時としては非常に珍しい鉄筋コンクリート2階建て。当時の面影をできるだけ残し令和3年に郷土資料館としてリニューアルしました。2階には町内に現存していた屯田兵屋をそのまま移築し、当時の生活を再現している他、農機具や生活道具、文献などを展示。1階はコミュニティスペースとなっており、自由にご利用いただけます。(開館時間は午前10時～午後7時。入館料無料。火曜日定休)

当麻の未来像

当麻の未来像は
自然・人が共存する
まちであり続けること。

持続可能なまちづくりは
町内外からの応援により
進めることができます

ふるさと納税

ふるさと納税は、応援したい自治体に寄付ができる制度のことです。当麻町では５つの寄付金使い道を設けています。寄付いただくことでお礼の品を受け取ることができ、寄付額の一部は所得税及び住民税の控除対象となります。

企業版ふるさと納税

企業版ふるさと納税は、企業が地方公共団体の地方創生の取り組みに対して寄附を行った場合に法人関係税を税額控除するものです。当麻町は４つの事業を設けまちづくりへの応援を募集しています。

Ｊクレジット

Ｊクレジットは省エネルギー設備の導入、再生可能エネルギー利用によるＣＯ２の排出削減、適切な森林管理によるＣＯ２の吸収量を「クレジット」として国が認証する制度です。企業が事業を行う上で、温室効果ガスの排出を避けられない場合、クレジットを用いて埋め合わすことができます。当麻町は適切な森林管理によるクレジット創出者です。クレジットを購入いただくことにより、当麻町の森林保全の後押しとなります。

全部ある当麻町

〒078-1393　北海道上川郡当麻町３条東２丁目11番１号
TEL:0166-84-2111
FAX:0166-84-4883

WEBでチェック！

当麻町　検索

当麻町の公式ホームページは町内在住のＷＥＢデザイナーと
地域おこし協力隊員が共同で制作しました